



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	学齡期の吃音児の言語処理に関する心理言語学的研究 : 語の音韻処理を中心に(論文要旨)
Author(s)	高橋,三郎
Citation	
Issue Date	2015-09-29
URL	http://hdl.handle.net/2309/140053
Publisher	
Rights	

氏 名 : 高橋 三郎
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博甲第258号
学位授与年月日 : 平成27年9月29日
学位授与の要件 : 学位規則第4条第1項該当 課程博士
学位論文名 : 学齢期の吃音児の言語処理に関する心理言語学的研究
一語の音韻処理を中心に一
論文審査委員 : (主査) 教授 伊藤 友彦
(副査) 教授 北島 善夫 教授 藤野 博
教授 鈴木 猛 教授 葉石 光一

学位論文要旨

吃音は様々な視点から検討されてきた。そのひとつに心理言語学的な視点に基づく研究がある。本研究は心理言語学的な視点に基づき、学齢期の吃音児の言語処理について検討したものである。

第1章では従来の吃音研究について概観し、本研究の目的を述べた。近年の吃音研究において、吃音幼児は統語処理に困難さをもつが、青年期や成人の吃音者は語の音韻処理に困難さをもつことが示唆されている。また、学齢期の吃音児については、青年期や成人の吃音者と同様に語の音韻処理に困難さをもつ可能性が指摘されている。しかし、我が国において、学齢期の吃音児の語の音韻処理に関する研究は少なく、詳細は明らかになっていない。そこで、本研究では、学齢期の吃音児の言語処理について、語の音韻処理を中心に検討することを目的とした。

第2章では、まず統語処理の検討を行った。第1節では等位節構文と関係節構文の吃音頻度を比較した。学齢期の吃音児が統語処理に困難さをもつのであれば、等位節構文よりも統語的に複雑である関係節構文で吃音頻度が高くなると予測される。しかし、両構文の間で吃音頻度に有意な差は認められなかった。この結果から、学齢期の吃音児は統語処理に困難さをもたないことが示唆された。第2節では名詞句と複合名詞の吃音頻度を比較した。その結果、名詞句と複合名詞の間にも吃音頻度に有意な差は認められなかった。よって、第2節の結果からも学齢期の吃音児は統語処理に困難さをもたないことが示唆された。

第3章では、語の音韻処理の検討を行った。第1節ではモーラ頻度が吃音頻度に及ぼす影響を検討した。モーラ頻度とは、単一のモーラがどの程度出現するのかを示した指標である。語頭と語末の両方のモーラ頻度が高い非語(「高一高」語)、語頭は高いが語末は低い非語(「高一低」語)、語頭は低いが語末は高い非語(「低一高」語)と両方とも低い非語(「低一低」語)の4種類を刺激語として用いた。その結果、4種類の刺激語の間で吃音頻度に有意な差は認められなかった。このことから、語頭と語末のモーラ頻度はいずれも吃音頻度に有意な影響を及ぼさないことが示唆された。第2節ではバイモーラ頻度が吃音頻度に及ぼす影響を検討した。バイモーラ頻度とは2つのモーラがどの程度隣接して出現するのかを示した指標である。ここでは、語頭と語末の両方のバイモーラ頻度の高い非語(「高一高」語)と語頭と語末の両方のバイモーラ頻度の低い非語(「低

「低」語)における吃音頻度を比較した。その結果、「低-低」語は「高-高」語よりも吃音頻度が有意に高かった。これらの結果から、バイモーラ頻度は吃音頻度に有意な影響を与えることが示唆された。第3節では、バイモーラ頻度が吃音頻度に及ぼす影響を語頭と語末に分けて検討した。刺激語として、語頭と語末の両方のバイモーラ頻度が高い非語(「高-高」語)、語頭は高いが語末は低い非語(「高-低」語)、語頭は低いが語末は高い非語(「低-高」語)、両方とも低い非語(「低-低」語)の4種類を用いた。その結果、「低-低」語は他の刺激語(「高-高」語、「高-低」語、「低-高」語)よりも吃音頻度が有意に高かった。この結果から、語頭のバイモーラ頻度のみならず語末のバイモーラ頻度も吃音の生起に影響を及ぼすことが示唆された。第4節では吃音児と非吃音児を対象に、バイモーラ頻度が反応潜時に及ぼす影響を語頭と語末に分けて検討した。刺激語は第3節と同様のものを用いた。その結果、「高-高」語の反応潜時は他の刺激語よりも有意に短く、「低-低」語の反応潜時は他の刺激語よりも有意に長かった。また、吃音児の反応潜時は非吃音児よりも有意に長かった。これらの結果から、吃音児と非吃音児は共に、語頭と語末の両方のバイモーラ頻度が反応潜時に影響することが示唆された。また、吃音児の反応潜時は非吃音児よりも長いことが示唆された。

第4章は総合考察である。本研究の結果、等位節構文と関係節構文の間でも、名詞句と複合名詞の間でも吃音頻度に有意差は認められなかったことから、学齢期の吃音児は統語処理に困難さをもたないと考察した。また、モーラ頻度ではなく、バイモーラ頻度が吃音頻度に影響したことから、学齢期の吃音児は、特に2モーラをまとまりとした処理に困難さをもっている可能性があることを考察した。さらに、語頭だけでなく語末のバイモーラ頻度も吃音頻度に影響したことから、従来指摘されている語頭だけでなく語末も吃音の生起に影響を及ぼすと考察した。最後に、学齢期の吃音児と非吃音児の語の音韻処理モデルを提案した。このモデルは、吃音児も非吃音児も、語頭の処理の終了後に語末の処理が始まり、語末の処理の終了後に構音指令の開始が行われるとしている点に特徴がある。